

# 学部学生による「地理学野外実習」を介した地域性の解明プロセス

## —三重県名張市の事例—

磯野 巧\*・宮岡 邦任\*・小西 弘純\*\*・  
近藤 祐介\*\*\*・清水 将彦\*\*\*\*・藤井 絵理\*\*\*\*\*

A Discovery Process of Regionality based on the 'Fieldwork Training in Geography' by  
Undergraduate Students in Mie University  
— A Case Study of Nabari City, Mie Prefecture, Japan —

Takumi Isono, Kunihide Miyaoka, Hirozumi Konishi,  
Yusuke Kondo, Masahiko Shimizu, and Eri Fujii

### 要 旨

本研究の目的は、2017年度に三重県名張市で実施した「地理学野外実習」の成果を題材として、学部学生が名張市の地域性をどのように見出したのかをフィールドワークの実施内容に基づき整理し、その成果と今後の展望を明示することである。磯野・宮岡(2017)を踏まえ、2017年度の地理学野外実習では、ジェネラル・サーベイにおける学部2年生の役割の明確化、先行研究の丁寧なレビューに基づく適切な研究テーマの設定を心掛けた。その結果、学部3年生は果樹栽培とツーリズムとの関わり、都市圏郊外地域の中心市街地の現代的役割、名張川を中心とした災害史および地域防災など、盆地ならびに大都市圏の地域性として取り上げられることの多いテーマを設定することができた。また、学部2年生はジェネラル・サーベイの経験を翌年度の地理学野外実習に繋げることができた。さらに、地理学野外実習で得られた知見は翌年度以降のフィールドワークなどで広く活用されており、後進の「地域を視る目」を養ううえで有用な基礎資料となっている。

キーワード：地理学野外実習、フィールドワーク、歴史的町並み、観光農園、水害、名張市

### 1. はじめに

学校地理におけるフィールドワークの実施は、地域を視る目を養成することができ、体験的かつ作業的学習の観点からその有効性と重要性が言及され続けている(山内ほか, 1986)。しかしながら、地域洞察力やフィールドワーク技法を十分に兼ね備えた教員は少数であり(伊藤, 2012)、多くの教育現場ではさほど活発にフィールドワークを実施していないことが報告されている(沼畑, 2019)。その一因として、教員養成課程における実習科目による地理的技能の涵養機会の少なさが指摘されている(篠原, 2000)。また、井田(2014)は日本の教育現場においてフィールドワークをはじめとする地域調査に関わる単元が幾分軽視される傾向にあることを問題視している。

このような状況を踏まえ、沼畑(2019)は高等学校の地理教育におけるフィールドワークの実施効果につ

いて論じている。そのなかで、単に見学や観察だけでなく、聞き取り調査などを交えた綿密なフィールドワークの実施が必要であり、さらに事前学習と事後指導を充実させるべきだと述べている。この点については、学習指導要領の改訂により地理歴史科の新規科目「地理総合」が必履修化される2022年以降、より重要度が増すものと思われる。

こうした背景のもと、磯野・宮岡(2017)では三重大学教育学部社会科教育コースの実習科目である「地理学野外実習」の諸課題を導出・整理し、フィールドワーク教育に関わる一連のプロセスを見直した。具体的には、実習科目の強化、分野横断的な調査テーマの設定、講義科目の一部実習化を提案し、社会科教員養成課程に在籍する学生がひとりでも多くフィールドワーク教育を享受すべきであることを強調した。池(2012)も指摘するように、小中高等学校教員がフィールドワークの魅力や価値を実感するためには、まず

\*三重大学教育学部社会科教育コース \*\*三重県松阪市立宮前小学校

\*\*\*三重県桑名市立明正中学校 \*\*\*\*越前市役所 \*\*\*\*\*稲沢市役所

自らがフィールドワークを経験し、その技法と指導法を体得することが必要である。ゆえに学校地理を担当する教員は基礎的なフィールドワーク技法を心得ておく必要があり、フィールドワークを介して地域社会の諸現象を理解し考える能力を学部学生のうちに育ておくべきだと言われている（磯野・宮岡, 2017）。

教員養成課程におけるフィールドワーク教育に関する既往研究をみると、備忘録や将来的な野外実習を設計する際の参考資料として蓄積されたものが多かった。一方で、近年では地方国立大学における「地域貢献」の観点から、とりわけ「身近な地域」を題材としたフィールドワーク教育の実践報告がみられるようになった（磯野・宮岡, 2017; 河本, 2018）。しかしながら、教員養成課程のフィールドワーク教育に関する実証研究は僅少であり、さらなる事例研究の蓄積とその比較検討が期待されている状況にある。

そこで本稿では、2017年度に三重県名張市で実施した「地理学野外実習」の成果を題材として、学部学生が名張市の地域性をどのように見出したのかをフィールドワークの実施内容に基づき整理し、地理学野外実習の成果と今後の展望を明示する。

研究手順として、まず地理学野外実習の概要と事前指導について説明する。つぎに、地理学野外実習で実施したジェネラル・サーベイと班ごとの調査内容を詳述し、その後どのような事後指導を施したのかを述べる。そのうえで、フィールドワークによって得られたデータの分析から導出した名張市の地域性を班別に示す。最後に地理学野外実習の成果と教育効果を明示し、今後の展望について検討する。

## 2. 地理学野外実習の実践

地理学野外実習の実施期間は2017年8月6日から10日までの4泊5日である。主たるフィールドワークの実施先は三重県名張市で、初日に行ったジェネラル・サーベイでは奈良県曾爾村にも訪問した（図1）。宿泊については、名張市中心部で4泊滞在した。参加人数は自然地理学分野4名（3年生2名、4年生1名、教員1名）、人文地理学分野7名（2年生2名、3年生3名、特別聴講生1名、教員1名）、合計11名であった。班編成は自然地理学分野1班（水害班）、人文地理学分野2班（中心市街地班、観光農園班）、合計3班である。なお、今回は社会科教育コースの他専攻の学生が1名参加しており、その学生は人文地理学分野の班に所属した<sup>2)</sup>。また、ジェネラル・サーベイのみ、4年生4名と大学院生1名が参加した。



図1 研究対象地域

### 2.1 事前指導

地理学野外実習の事前指導として、地理学野外実習のオリエンテーションを複数回実施し、行程や宿泊施設、研究テーマ、携行品などフィールドワークに関わる必要事項を説明した。また、地理学演習にて、地域調査に関わる論文紹介、地域調査の構想、デスクワークの進捗状況などを地理学演習にて班別に発表させた。論文紹介で取り扱ったのは、溝尾・菅原（2001）、林・呉羽（2010）、小山・藤本（2016）である。ここまでは2016年度の事前指導と概ね同様である（磯野・宮岡, 2017）。

加えて、地理学野外実習の実施期間に円滑にフィールドワークを実施できるよう、事前に3年生を連れて名張市へ赴き、市役所をはじめ関係各所に挨拶と調査協力依頼を行った。名張市役所には社会科教育コースの卒業生A氏が勤めており、A氏を中心にフィールドワークに関わる便宜を図っていただいた。2017年度の地理学野外実習ではツーリズムに関わる調査内容が含まれているため、繁忙期前を迎えるに名張市役所や名張市観光協会に聞き取り調査を実施した。ほか、3年生以外も名張市に連れていき、ジェネラル・サーベイの実施に向けた事前調査を実施した。今回の地理学野外実習からはジェネラル・サーベイの行程作成を全面的に2年生に任せており、滞りなく遂行できるよう、巡検ルートや説明地点を念入りに選定した（図2）。

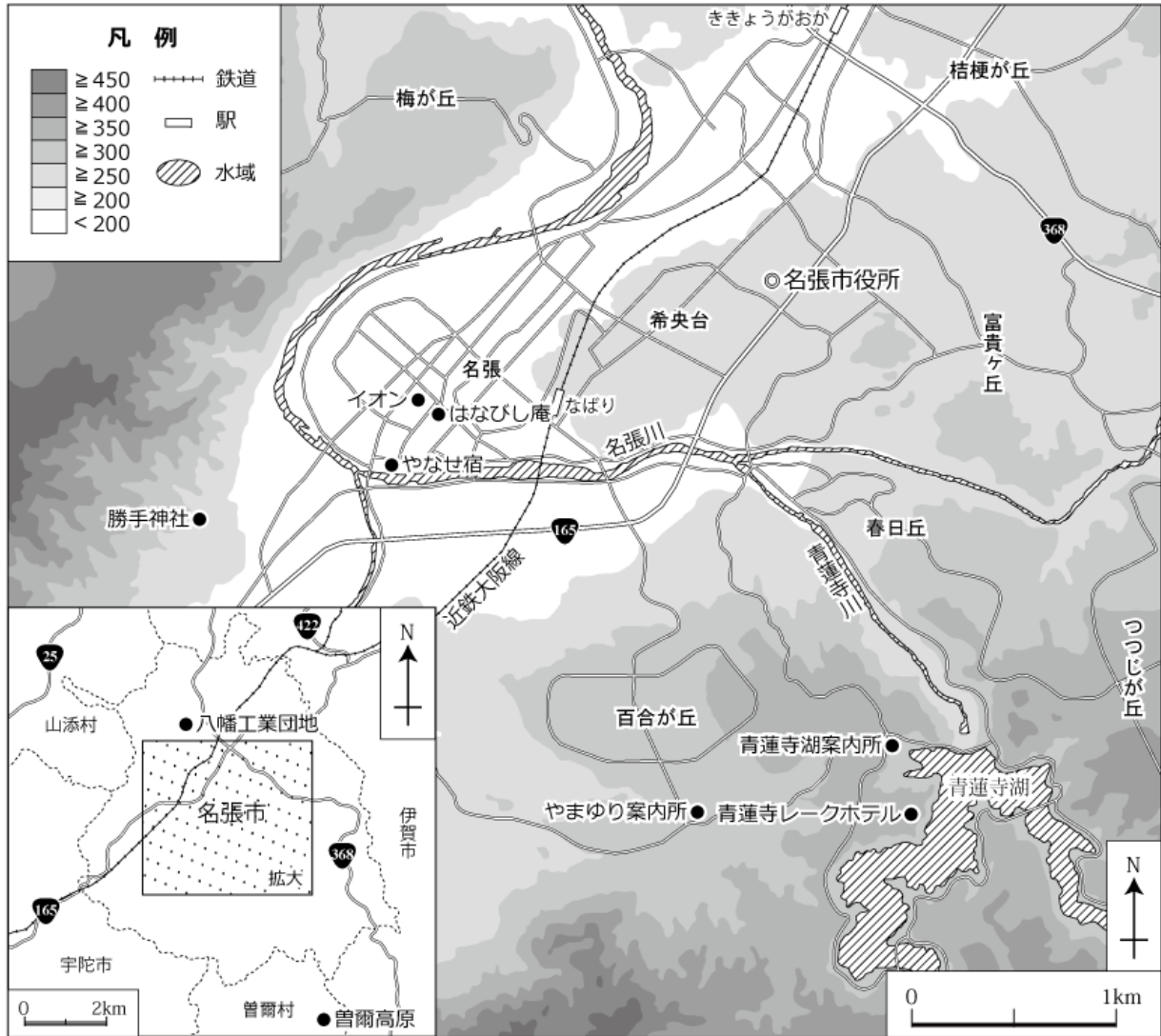


図2 名張市の概観 (2017年)

## 2.2 フィールドワークの具体性

### 2.2.1 ジェネラル・サーベイの実施内容

最初に訪問したのは桔梗が丘駅である。名張市は大阪都市圏として数多くの住宅団地が立地するが、桔梗が丘団地は最初期に開発されたものである。この団地は近鉄グループが建設したものであり、他の郊外型住宅団地と異なり鉄道駅に近接した場所に立地する点が特徴的である(図3)。ジェネラル・サーベイでは、桔梗が丘団地の立地特性を景観観察から把握するとともに、名張市の人口増加のプロセスを説明した。

次に八幡工業団地へ移動し、名阪国道との近接立地や業種構成に関する説明がなされた。次の訪問先の勝手神社では、名張市中心部を俯瞰した。勝手神社からは名張市中心部をはじめ、百合ヶ丘や春日丘、富貴ヶ丘の各郊外型住宅団地、国道165号沿いに立地するロードサイド型商業施設の分布などを確認することができる(図4)。名張市では中央公園展望台ビューナより

市街を眺望できるが、事前に名張市を訪問した際に勝手神社の方が広域的に街を眺められることを確認しており、ジェネラル・サーベイの行程に組み込むことにした。勝手神社からは、眼下を西から東に流れる宇陀川と南から流れてくる名張川の勾配の違いが確認でき、名張川が現在の流路を流れることになったため、宇陀川との合流点付近を中心に堤防からの越流による水害の危険性が生じたことがわかる。

勝手神社訪問後は中心市街地に赴き、初瀬街道を歩きつつ歴史的町並みを観察した。ここでは、中心市街地(以下、名張地区)における商業機能の衰退と歴史的町並みを活かした地域活性化に関する説明があった。その際、地域活性化の拠点機能をもつ歴史的建造物「やなせ宿」に足を運び、その内部利用の実態や初瀬街道に関わる史的事実について確認した。続く春日丘では、郊外型住宅団地の実情に関する説明がなされた。近年における人口の都心回帰現象や居住者の高齢化などの

影響から、名張市の郊外型住宅団地では空き家の発生が問題視されている。また、春日丘地区には宅地造成工事が進展しつつも実際に住居が建設されず、空地や太陽光パネルが卓越する地区が存在する(図5)。こうした状況を名張市の人口動態に着目しつつ、景観観察を通して把握した。



図3 桔梗が丘駅におけるジェネラル・サーベイの様子  
(2017年7月 磯野撮影)



図4 勝手神社から中心市街地や河川合流地点を俯瞰する学生の様子  
(2017年7月 磯野撮影)



図5 春日丘地区の様子  
(2019年7月 磯野撮影)



図6 曾爾高原の概観と遊歩道  
(2017年3月 磯野撮影)

春日丘訪問後は、百合ヶ丘地区を經由して青蓮寺地区に向かった。当該地区は果樹園が卓越しており、観光農園が数多く立地している。地理学野外実習実施期間はブドウ狩りの開演期間であったため、実際に生食用のブドウを堪能しつつ、観光農園の施設配置や果樹園の景観を観察した。その後は室生赤目青山国定公園の一角を成す香落溪に赴いた。香落溪は名張川支流の青蓮寺川にある溪谷で、柱状節理の岩肌が連続する景勝地である。ここでは景観形成のプロセスやレクリエーション利用に関する説明がなされた。

最後に訪問したのは曾爾高原である。曾爾高原は日本300名山のひとつである倶留尊山から亀山を結ぶ西麓に広がる高原で、ハイキングコースが整備されており尾根から高原一帯を望むことができる(図6)。曾爾高原は香落溪と同様、室生赤目青山国定公園に指定されている。2014年には室生赤目青山国定公園の区域である奈良県(宇陀市、曾爾村、御杖村)と三重県(津市、伊賀市、名張市)によって東大和西三重観光連盟が組織され、広域的な観光プロモーションが図られている。ゆえにツーリズムという切り口でみると、名張市と曾爾村は非常に関わりが深く、地域の結びつきを理解するうえで曾爾高原は理に適った場所であると判断し、最後の説明地点として選定した。

## 2.2.2 フィールドワークの実施内容

### 2.2.2.1 中心市街地班

中心市街地班の主たるフィールドワーク内容は、初瀬街道における土地利用調査と景観観察、歴史的建造物の所有者や名張地区まちづくり推進協議会、名張市教育委員会に対する聞き取り調査である。土地利用調査は昨年度の地理学野外実習と同様に、最新版住宅地図の複写物と土地利用記入用紙を準備し、それらに土地利用の形態と特性を記録した(磯野・宮岡, 2017)。また、その経年変化を理解するために、1969年、1984

年、2001年のゼンリン住宅地図を資料として収集した。景観観察では、初瀬街道に立地する歴史的建造物の空間分布について調査した。その際、歴史手町並みを構成する景観要素<sup>3)</sup>として、厨子二階、卯建、虫籠窓、格子・格子戸、以上四点を抽出した。

聞き取り調査に関して、歴史的建造物の所有者に対しては町並み保全に対する意識やその活用実態を訊ねた。名張地区まちづくり推進協議会には主として中心市街地における地域活性化の具体性や旧細川邸「やなせ宿」の活用実態について話を伺った。

### 2.2.2.2 観光農園班

観光農園班は、まず名張市とくに青蓮寺地区の果樹栽培に関わる資料収集を行った。具体的には、名張市立図書館にて名張市史や小学校の副読本などを閲覧・複写した。つぎに、観光農園を取りまとめている青蓮寺湖ぶどう組合、個々の観光農園(16軒)、青蓮寺ぶどう組合の元会長B氏、香落溪温泉青蓮寺湖レークホテル(以下、レークホテル)に対して聞き取り調査を実施した。聞き取り調査では、青蓮寺ぶどう組合には観光農園の運営方式、個々の観光農園には観光農園の経営実態、B氏には青蓮寺地区における農業とツーリズムに関する歴史的変遷、レークホテルには観光農園との関わりについて訊ねた。

### 2.2.2.3 水害班

水害班は、地形図から名張川、宇陀川、それらの河川の支流について河床勾配断面図を作成し、地形の特徴を把握した。その後、現地において作成した地形断面図を基に河床の遷急点と河川の合流点における流量の変化や付近の水神、水害に関する石碑の分布調査を行った。さらに市役所、図書館、郷土資料館などの関係機関における水害履歴、水害後の河川管理に関する聞き取り調査を行った。また、平水時の河川水の合流に伴う水質の変化から、各河川の出水量の推定を試みた。

### 2.3 事後指導

前年度と同様、事後指導は地理学演習を通して実施し、フィールドワークによって得られた一次資料の分析結果や考察の方向性について議論した。また、2017年度より実習科目「自然地理学実習」「人文地理学実習」を復活させ、そのなかで地理的技能の指導機会を設けることにした<sup>4)</sup>。これらの実習科目では、数に限りのある分析機材を用いるため、現状、地理学専攻の学生のみを受講対象としている。なお、2017年度より開講した科目であるため、受講対象学年の2年生だけでなく、3年生4名、4年生2名が履修し、オブザーバーとして大学院生1名も参加した<sup>5)</sup>。人文地理学実習では、主にIllustratorによる製図方法の指導と土地利用調査の模擬練習を実施した。自然地理学実習では水質分析

の実習と得られたデータを数種類のグラフで作成する手法の習得を行った。

例年、地理学野外実習の成果は、翌年度夏季に実施する地域調査報告会にて公开发表を行っている。2018年度も7月に地域調査報告会が開催され、名張市でのフィールドワーク成果の報告がなされた(図7)。加えて、観光農園班の研究成果については日本地理学会2018年春季学術大会の観光地域研究グループにて口頭発表を実施した(図8)。さらに、来る卒業論文に向けた学生の文章力強化を目的として、今回は地域調査の報告書作成を試みた(3章)。次章では、地理学野外実習とそれに関わる事前・事後指導によって学生が導出した名張市の地域性をテーマごとに明示する。



図7 地域調査報告会で発表する学生  
(2018年7月 磯野撮影)



図8 日本地理学会で発表する学生  
(2018年3月 磯野撮影)

### 3. 地理学野外実習を介した地域性の解明

#### 3.1 中心市街地班

##### 3.1.1 研究課題と目的

中心市街地班の研究題目は「名張市中心市街地における歴史的町並みの空間的変容」である。高度経済成長期以降、中心市街地の空洞化やそれに伴う再開発の進展によって歴史的町並みは急速に失われていった。こうした状況下、1960年代頃より町並み保全の機運が全国的に高まり、とりわけ1975年の文化財保護法改正により「重要伝統的建造物群保存地区」制度の導入がその動きを加速化させた。以降、歴史的町並みを活かしたまちづくり運動が活発に取り組みられるようになった（大橋ほか, 2003）。こうした保全運動によって整備ないし修景された歴史的町並みは観光資源としての性格を帯びようになり、とくに主たる観光資源をもたない過疎地域や農山村地域では地域活性化の一手段となることもある（磯野・植手, 2019; 淡野・呉羽, 2006）。

歴史的町並みに関する地理学的研究は、主として歴史的町並みの形成過程を論じた研究（小堀, 1999; 大橋ほか, 2003）、町並み保全運動をめぐる住民意識に関する研究（中尾, 2006; 磯野ほか, 2015）、そして今回中心市街地班が取り上げる町並み保全運動に伴う商業振興やツーリズムに関する研究（磯野・植手, 2019; 兼子ほか, 2004; 溝尾・菅原, 2001）に大別される。しかしながら、既往研究のほとんどが重要伝統的建造物保存地区を対象としたものであり、歴史的町並みを活かした住民主導による取り組みは、その具体性があまり解明されていない。

そこで中心市街地班では、名張地区の初瀬街道を対象として、歴史的町並みを活かした地域活性化に関わる多様な主体の活動を分析することより、名張地区の空間的な変容過程にみられる特徴を明らかにすることを研究課題として設定した。

##### 3.1.2 名張地区の概要

名張市は伊賀地域の南部に位置する地方都市である。江戸初期に藩主藤堂高虎の養子高吉が名張に移封された後、初瀬街道（伊勢参り）の宿場町として街の骨格が形成され、また藤堂氏の城下町として大きな発展を遂げた。1889年に町制を施行した頃より、名張町は商業地域としての性格を強め、伊賀および大和の境界における地域経済の要としての役割を担うようになった。さらに、1920年代以降に伊賀鉄道や参宮鉄道<sup>6)</sup>が開通したことにより、名張町は産業、とくにツーリズムの文脈において成長することとなった（名張市, 2017）。

名張市の人口は78,918（2018年6月）であり、1960年頃から大阪都市圏の一部として住宅団地の開発が進み人口が急増したが、2000年頃から減少に転じている

（図9）。なかでも、名張地区ではその傾向が顕著である。かつて名張地区は名張市の中心市街地として栄えていたが、桔梗が丘団地の開発を皮切りに郊外で大規模な住宅団地の開発が進展したことで、商業の空洞化や人口流出がみられるようになった。さらに、1960年代に新しい市街地形成を目指した土地区画整理事業が進められ、名張地区から希中央や鴻之台に市役所や消防署といった行政機能が移転した。ほかにも、1973年に名張地区にイオン（旧ジャスコ）が進出し、また初瀬街道近くに県道が整備されたことで、初瀬街道では往来の賑わいが徐々にみられなくなった。

##### 3.1.3 商業機能の衰退

本項では初瀬街道における商業機能の動態を説明する（図10）。1969年は郊外型住宅団地の開発が始まった時期だが、初瀬街道には数多くの店舗が立地している。その業種構成をみると、飲食料品だけでなく、鍛冶屋、たばこ屋、新聞社など多岐にわたっていた。1984年になると店舗数がやや減少している。2001年は全体的に店舗数が少なくなっているが、とくに新町や本町はその傾向が顕著である。他方、中町や榊町では小売店の軒数は減少したものの、居酒屋の新規立地を確認することができる。2017年はさらに店舗数が減っており、2001年頃まである程度の商業集積が認められた中町、榊町、松崎町、上八町でも減少していることがわかる。

郊外型住宅団地の開発が進むにつれて、国道165号沿いにロードサイド型商業施設が立地し、名張地区の商業機能は大きく後退した。また、近年では人口流出や居住人口の高齢化が深刻化し、空き店舗や空き家が目立つようになってきた。

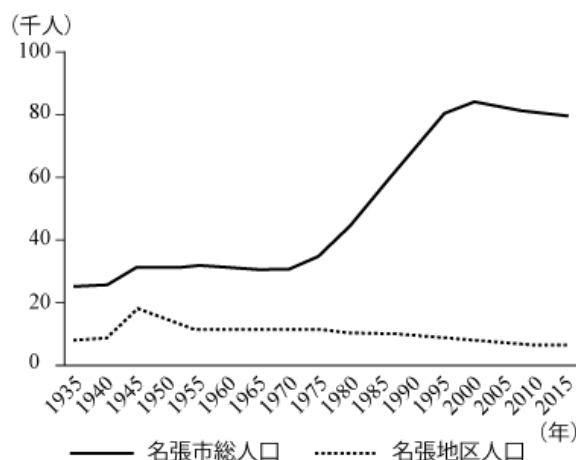


図9 名張市および名張地区の人口動態  
(1935-2015年)

(国勢調査により作成)

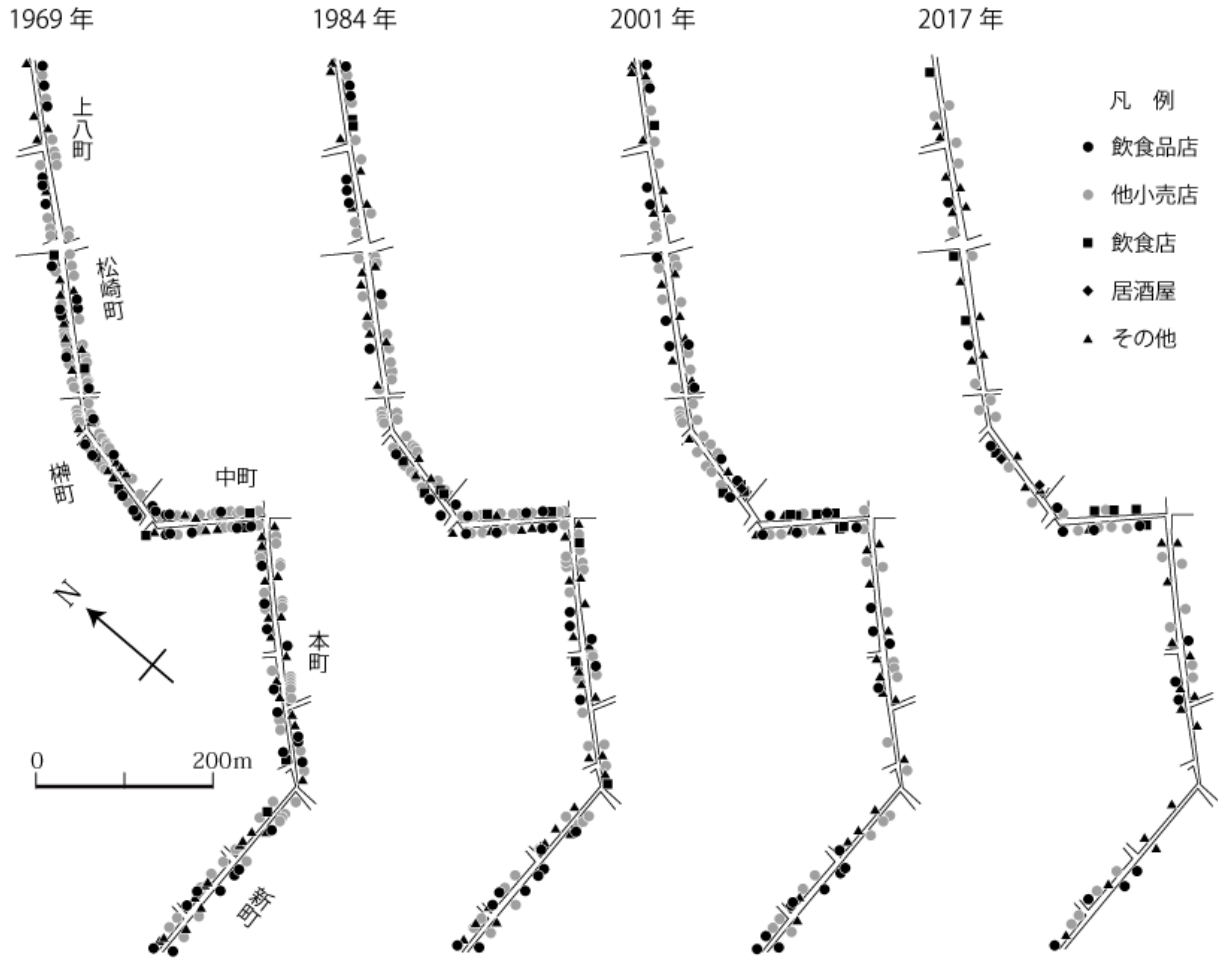


図10 初瀬街道の業種構成の変化（1969年、1984年、2001年、2017年）  
（現地調査およびゼンリン住宅地図を基に作成）

### 3.1.4 歴史的町並みを活かした地域活性化

初瀬街道には登録有形文化財に指定されている歴史的建造物が数多く立地しており、そこには歴史的な宿場風情が今なお残されている。歴史的町並みを構成する景観要素の空間分布をみると、新町、本町、上八町に歴史的建造物の立地が顕著である（図11）。これらの地域には登録有形文化財が数多く分布している。一方で、中町や榊町には歴史的建造物が少ない。松崎町は格子・格子戸をもつ歴史的建造物がみられるが、その多くが空き家となっている。

こうした状況下、名張市では2004年に策定した総合計画「理想郷プラン」にて、名張地区における歴史文化を活かした集客交流の実現を掲げている。また、2005年に定めた「名張まちなか再生プラン」に基づき、初瀬街道に立地する歴史的建造物の修景事業や歴史拠点づくり事業に取り組んでいる。これらの事業によって、初瀬街道に築瀬水路が整備されたり、旧細川邸を改修して「やなせ宿」が設立されたりした（図12）。

また、登録有形文化財の指定も景観整備に大きく貢献している。文化財「登録」制度が運用された1996

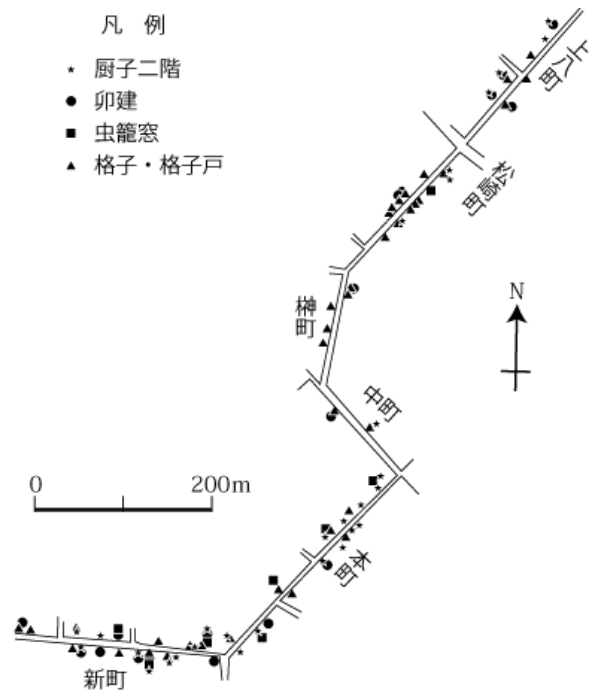


図11 初瀬街道における景観要素の分布（2017年）  
（現地調査により作成）



図 12 旧細川邸「やなせ宿」  
(2017年6月 藤井撮影)



図 13 登録有形文化財のプレート  
(2017年3月 藤井撮影)

年以降、名張市には登録有形文化財がひとつも存在しなかったが、2007年より登録有形文化財の登録に向けた調査が実施されるようになった。その結果、2017年7月の段階で10軒20棟が文化財として登録され、うち6軒9棟は名張地区にある(図13)。

やなせ宿では集客交流や地域活性化に向けた様々な事業やイベントが行われているが、そのなかでとくに活発に取り組まれているのがワンデイシェフ事業<sup>7)</sup>で

ある。ワンデイシェフとは、日替わりで希望者がランチを調理し提供する運営方式を指す。2016年には年間147日実施された。このワンデイシェフ事業には趣味で料理を行う人だけでなく、将来的に飲食店の出店を考えている人がその腕試しとして参加することもある。とくに出店希望の若者がワンデイシェフを介して自信をつけ、将来的に初瀬街道にある空き家を使って出店してもらうことを当該事業の目的のひとつとしている。

また、やなせ宿ではそば打ちや魚釣りといった体験教室や書道教室、連鶴教室など地元住民を対象としたイベントを数多く主催している。これらのイベントには名張市やその近隣地域からも多数の訪問がみられ、とりわけ子連れ家族の参加が一定数認められる。名張市は郊外化の進展により転入人口の増加を経験してきたが、郊外型住宅団地の居住者は名張市の歴史や文化に接する機会があまり多くないという。それゆえ城下町および宿場町の情緒を残す名張地区は、子どもたちや郊外型住宅団地の居住者が名張市の歴史や文化を体験し学習できる空間であり、やなせ宿は名張地区と周辺地域とを結びつける「交流拠点」としての役割を担っていると解釈することができよう。

ほかにも、登録有形文化財をはじめ、初瀬街道には独自で名張地区の歴史や文化を紹介したり体験させたりする「まちかど博物館」が立地する。たとえば、中町にある角田酒店が運営する「はなびし庵」では、オリジナルの歴史影絵を作成し、「影絵劇場」として訪問者に披露している(図14)。この歴史影絵を披露するはなびし庵はパッケージツアーの訪問地のひとつに組み込まれることもあり、名張市民に限らず集客圏が非常に広域となっている。

さらに、名張地区まちづくり推進協議会では、観光パンフレットにゆるキャラを用いて名張地区の歴史的町並みを広報したり、地元の高校生とともに名張地区の散策コースを策定したりしている。また、地元の高



図 14 はなびし庵の歴史影絵と影絵劇場  
(2017年8月 藤井撮影)



校生とはまちづくりの意見交換会を実施しており、若者を参画させ育成するプロジェクトを実施している。

ほかにも、名張市観光協会では「食べ歩きクーポン」を作成し、初瀬街道をはじめとする名張地区の回遊性を高めるための取り組みを試みている。

### 3.1.5 小括

名張地区は全国の中心市街地と同様に、商業機能の衰退や人口流出によって空洞化が進展しており、往來の賑わいが失われつつあった。こうしたなか、初瀬街道の歴史的町並みを活かした取り組みが行政主導で実施されていた。とくに、やなせ宿におけるワンデイシェフ事業は単なる交流拠点としての役割にとどまらず、空き家活用や移住促進に大きく貢献しているものと思われる。また、高度経済成長期以降に人口の社会増加を経験した名張市には、中心市街地にあまり縁のない住民が一定数存在し、彼らが名張市の歴史や文化に接する機会は限定的であった。やなせ宿をはじめとする初瀬街道の町並みは歴史文化的資源として彼らに学習機会を提供し、中心市街地と郊外とを結びつける空間として機能していた。加えて、名張地区ではまちかど博物館など民間による地域活性化に関わる取り組みも行われているが、一方で担い手の高齢化といった諸問題も抱えている。ゆえに、今後は次世代がいかにして中心市街地の歴史的町並みを維持管理していくのか、それを活かした地域活性化方策をいかに講じていくかが論点となるであろう。

## 3.2 観光農園班

### 3.2.1 研究課題と目的

観光農園班の研究題目は「名張市青蓮寺地区における観光農園の経営特性」である。高度経済成長期以降、日本では国民の所得や余暇時間が増加するプロセスのなかで、観光農園が大きく発展した。観光農園の多くは、大都市圏または地方中心都市から訪問者が到達しやすい果樹生産地域に成立する（呉羽, 2013）。従来、観光客は自身による果実の「もぎとり」と新鮮な果実を土産品として購入することを主目的としていたが、近年ではジャムやジュースといった加工品の購入に加えて、BBQや魚釣りといった多角的な経営に取り組む観光農園も確認される。

観光農園に関する地理学的研究は、これまでに一定の蓄積がなされている。たとえば、栗林ほか（2011）は長野県須坂市を事例として、周遊ルートの変化が観光農園の経営に大きな影響を及ぼしており、近年では果実の宅配に経営の重点を移行させている観光農園が増加していることを指摘した。林・呉羽（2010）も観光農園の経営に関わる交通体系の重要性を強調しており、国道や高速道路の開通が観光農園の立地展開に与

えた影響を分析した。他方、単に観光需要に応えるだけの経営では収益の維持が困難となるため、今後は個人客やリピーターを獲得するなど観光客との信頼関係を構築することが必要になると述べている。ほかにも、個々の観光農園の自助努力や工夫、観光農園間のネットワーク構築による地域レベルでの維持活動を行うべきだと指摘した小池（2002）、観光客の嗜好性に合わせた多角的な経営戦略を講じる必要性に触れた井口ほか（2008）、周辺観光地との近接効果を重視した観光農園の事例を分析した全（2013）などがある。

以上のように、観光農園に関する研究は十分な蓄積がみられるものの、観光客の嗜好やライフスタイルがますます多様化しつつある現代において、観光農園の経営形態も一層の変化を遂げていることが予想される。ゆえに観光農園の将来的な在り方を議論するうえで、さらなる事例研究の蓄積が必要と考えられる。

そこで観光農園班では、名張市青蓮寺地区における観光農園の経営特性を、当該地域における農業とツーリズムをめぐる歴史の変遷に着目しつつ、観光農園の具体的な経営実態を分析することより明らかにすることを研究課題として設定した。

### 3.2.2 青蓮寺地区における農業の歴史の変遷

青蓮寺地区では明治期より野菜や茶を栽培していたが、大正期から昭和初期にかけては桑の栽培が盛んであった。ゆえに青蓮寺地区は養蚕地域として名を馳せることとなった。しかし、第二次世界大戦後は全国的に養蚕業が衰退し、青蓮寺地区でも桑畑から甘藷畑へと土地利用が変化していった。1955年頃には戦後の食糧不足が解消され、青蓮寺地区の農業も米や野菜の栽培が中心となった。一方で、当時青蓮寺地区は交通網が未発達であり、他地域と比して農作物が売れにくい状況に置かれていた。

こうしたなか、当時栽培量が少なかった果樹栽培が採用されるようになり、青蓮寺地区でブドウの栽培がはじまった。1960年にブドウの苗木が植え付けられ、1965年より本格的な生産が開始された。当時は主たる販路が確立されていなかったため、生産者は鉄道に乗って大阪や伊勢にてブドウを販売していたという。

三重県における販売目的で栽培したブドウの経営体数（2015年）をみると、名張市は41と三重県全体（139）の約30%を占めている<sup>8)</sup>。栽培面積については、三重県全体（53ha）の約40%が名張市（23ha）にある。ゆえに名張市は県内でも有数のブドウ栽培地域といえる。

### 3.2.3 青蓮寺地区における観光農園の発展

青蓮寺地区は1970年に青蓮寺湖（青蓮寺ダム）が完成したことで親水空間が創出され、また1975年に近鉄グループのレークホテルが開設したことで観光目的地としての性格が強まった（図15）。こうした状況下、



図 15 青蓮寺湖畔に立地するレークホテル  
(2019年7月 磯野撮影)

青蓮寺地区のブドウ生産者は相次いで観光農園を開設し、青蓮寺湖を訪問する観光客にブドウを直売したりもぎ取り体験を提供したりしていた。後にB氏を中心としたブドウ生産者が「青蓮寺湖観光村」を設立しており、組織的に観光農園を運営している。

B氏は青蓮寺ぶどう組合の会長時代に諸規則を設けており、それは今なお引き継がれている。また、青蓮寺湖周辺の道路沿いに近隣観光地の案内看板を設置したり、「ふるさとわが村青蓮寺」を出版したりと、青蓮寺地区の観光振興に対して精力的に取り組んでいた。現在も近隣の百合ヶ丘小学校の児童に対してブドウづくりを教えたり、曾爾高原の植物観察会を開いたりしている。さらに、B氏は近鉄大阪線上本町駅（現大阪上本町駅）の営業所に勤務していたため、近鉄と観光農園の関わりも深い。たとえば、近鉄を利用してレークホテルを訪問する観光客には観光農園へ直接送迎を行ったり、また観光農園のブドウジュースやワインを販売したりしている。また、近鉄の乗車券と観光農園の入園券をセットにした割引切符を販売していた時期もあったという<sup>9)</sup>。ただし、モータリゼーションが進展した現在においても、近鉄を利用して観光農園を訪問する観光客も一定程度おり、夏季から秋季にかけて名張駅には観光農園の幟が設置されている（図16）。

青蓮寺湖観光村の入込客数は1970年より急激に増加しており、バブル期にかけては年間約70,000人近くを推移していた。しかし、1992年に最盛期を迎えた後はバブル経済の崩壊とともに入込客数も大幅に減少した。2000年以降、入込客数は年間50,000～60,000で落ち着いている。2015年の入込客数は55,057であった。これはまちの駅なばり（癒しの里名張の湯315,326、とれたて名張交流館171,123）、赤目四十八滝155,296、香落溪141,690、青蓮寺湖87,356、まちの駅アスパ68,160に次ぐ数値である。



図 16 名張駅に設置された観光農園の幟  
(2017年7月 近藤撮影)

### 3.2.4 青蓮寺地区における観光農園の経営特性

青蓮寺湖観光村の特徴として、その運営形態が極めて組織的であることが指摘できる。たとえば、観光農園の宣伝は原則的に組織として実施しており、個人的にSNS等で広報活動を実施することは規約で禁止している。また、観光農園の受付は、やまゆり案内所もしくは青蓮寺湖案内所で行うことになっており、観光客は事前に清算を済ませた後、案内された観光農園に赴く流れとなっている。観光客の分配は観光農園の農地面積に応じて決定される。ただし、観光客からリクエストがあった場合に限り、希望する観光農園に案内することもある。

観光農園は最盛期には38軒立地していたが、2000年頃より徐々に減少し、2017年時点では23軒が経営している（図17）。本稿では聞き取り調査を実施した16軒の経営形態を分析した（図18）。その結果、経営者は全員男性であり、そのほとんどが60歳以上であることがわかった。原則的に家族経営であるが、繁忙期にはパート従業員を雇用する農園が多い。後継者については未定ないし無と回答した農園が大半を占めている。栽培作物をみると、ブドウに加えて米（農園2, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 16）やイチゴ（農園2, 12）が目立ち、ブドウそのものも多品種を導入している。なお、青蓮寺地区では冬季にイチゴのもぎ取りも実施しており、農園2や12ではイチゴの直売なども行なっている。ただし、ビニルハウスの導入などある程度の初期投資を要することから、イチゴ栽培に積極的でない農園も複数確認された。ブドウの販売方法をみると、主として宅配に比重を置く農園（3, 5, 11, 16）、もぎ取りを重視する農家（1, 2, 6, 8, 9, 10）に大別することができる。



図 17 観光農園の概観 (2017 年)  
(2017 年 8 月 磯野撮影)

つぎに、観光農園の客層と集客上の工夫について確認する(表 1)。集客圏をみると、総じて三重県内からの訪問が目立つ。加えて、名古屋市や奈良県、大阪府など近鉄大阪線ないし名古屋線で乗り換えせずに訪問できる地域も主要な集客圏となっている。青蓮寺地区の観光農園は個別に広報活動を実施することはできないが、訪問客に対して暑中見舞や年賀状を送付するなど工夫を凝らしている。それゆえ常連客率は総じて高く、50%を越す農園も少なくない(4, 5, 6, 10, 13, 16)。また、他の観光農園との差別化を図るために、多品種のブドウを導入したり、品質向上に努めたりしている。

### 3.2.5 小括

青蓮寺地区は 1970 年のダム完成に伴い親水空間が形成され、観光目的地としての性格が強くなった。とりわけ近鉄大阪線沿線および近鉄名古屋駅と大阪難波駅のほぼ中間地点に位置する良好な立地条件は、観光農園の発展に大きく寄与したと思われる。青蓮寺地区の観光農園は組織的な活動を展開している点に大きな特徴があり、各ブドウ栽培農家の協力のもと集客を図ることで等しく利益を得る方法を採用していた。他方、このことは個人の経営工夫による差別化を図りにくい状況を生み出しているが、それぞれの農園は暑中見舞や年賀状を通して訪問客との繋がりを重視しており、リピーターの確保という点においては農園ごとの独自性がみられた。人口減少社会の到来に伴って、国内旅行市場はますます縮小することが予想される。青蓮寺地区も例外でなく、既に閉園した観光農園も数多くみられており、将来的には他地域の観光農園集積地と競合することになると考えられる。ゆえに、今後は青蓮寺湖観光村としての水平的な関係性を維持しつつも、観光農園ごとの多角経営や新たな宣伝活動を介した独自の経営工夫が重要性を増すことになるであろう。

## 3.3 水害班

### 3.3.1 研究課題と目的

水害班の研究課題は、名張川水系における名張市の水害特性である。名張市は日本書紀において「名壘の横河」と記された淀川水系に形成された都市である。名張市の中心市街地は、名張川をはじめ青蓮寺川、宇陀川などの河川が合流する伊賀盆地南部に位置する名張盆地の底部に展開しており、大雨による洪水の被害にたびたび遭ってきた(名張市, 2016)。現在、市街地の周縁部にあたる名張川の近傍や郊外の宇陀川近傍では、河川改修や堤防の改修による洪水対策がとられている。国土交通省は、2011 年 3 月の東日本大震災で被害の遭った東北地方において、古文書の記載や石碑などの遺跡から過去に発生した自然災害と被害の状況を把握し、石碑などの遺跡については建立位置を地図化することで、避難情報として活用する目的で整備を進めている(国土交通省, 2019)。名張川、青蓮寺川、宇陀川が合流する名張盆地の低地部は、古来より川の氾濫による水害に悩まされ、安全を願う水神碑がいくつも見られる。国土交通省の取り組みにみられるように、各地で発生している自然災害に対して過去の履歴をまとめ地図化することは、地域の防災減災活動や対策に役立てることができる重要な資料となる。

本研究では、当該地域における水害の実態や危険性と水神碑の建立位置との関係性について検討することを目的とした。

### 3.3.2 対象地域の地形地質と土地利用

対象地域を流れる主な河川は、青蓮寺川が名張川と合流し中心市街地が分布する台地の南縁、西縁、北縁を回り込むようにして流れ、伊賀盆地北部に向けて丘陵地を北に貫流していく。名張川が上流から下流に蛇行する右岸側に形成された段丘面上に中心市街地が分布している。名張川と宇陀川の合流点から下流の右岸側には低位面が広がっている。低位面には水田が分布しており、近年の区画整理に伴って宅地化が進んでいる。宇陀川では山地に挟まれた流路に沿って低地が広がっており、河川の近傍には自然堤防の形成が確認できる。自然堤防の土地利用は住宅地と畑地となっている。後背湿地には、水田が分布している。

名張川、宇陀川、青蓮寺川の流域で地質が異なっており、それぞれ黒雲母花崗岩、火山礫凝灰岩、砂岩泥岩起源変成岩が卓越して分布する(西岡ほか, 1998)。これらの地質条件の差異は、侵食力の地域的差異を生んでいる。図 19 は名張川、宇陀川、青蓮寺川の河床勾配を示したものである。河床勾配は河川によって異なっており、地質の違いによって侵食量が異なることが河川間の河床勾配の差異を生んでいると考えることができる。

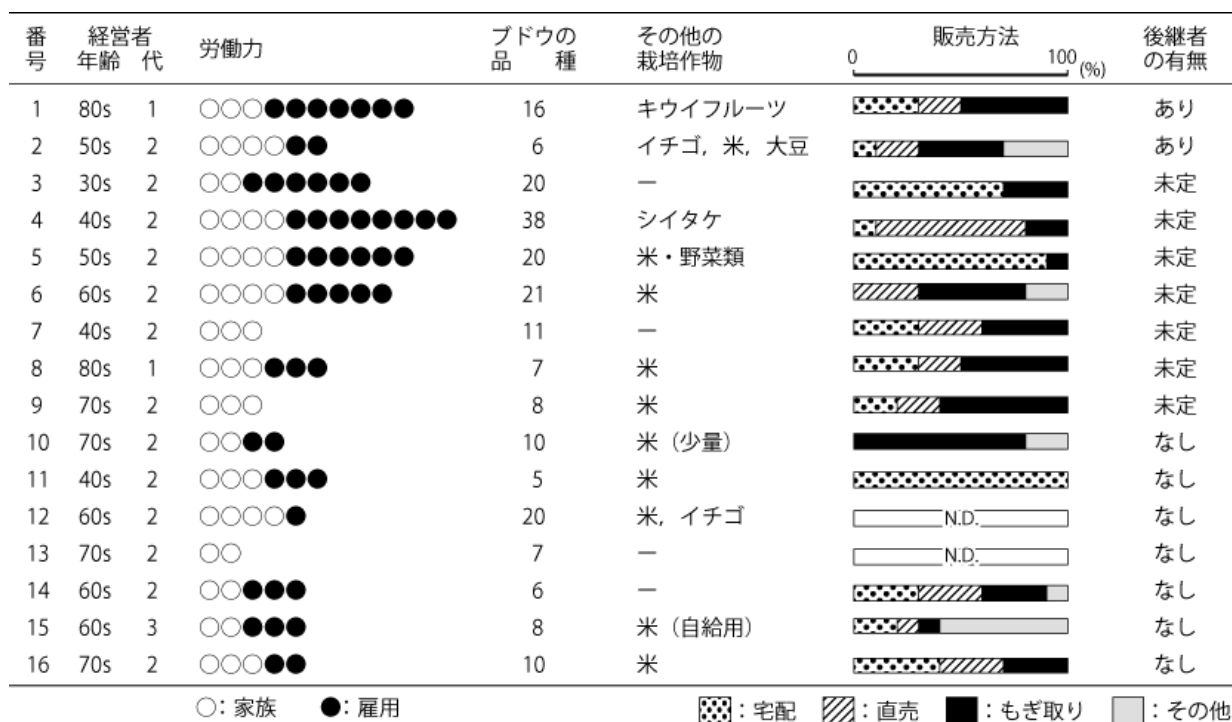


図 18 調査対象農園の基本属性 (2017 年)

(聞き取り調査により作成)

表 1 調査対象農園の客層と集客上の工夫 (2017 年)

番号	常連客率 (%)	集客圏	集客上の工夫	他の観光農園との差別化
1	20	県内 (津市, 四日市市, 松阪市, 志摩市), 名古屋市, 大阪府, 奈良県	暑中見舞・年賀状	常連客の確保
2	10-30	県内, 名古屋市, 大阪府, 奈良県	暑中見舞・年賀状	—
3	20-30	東海 3 県, 奈良県, 和歌山県, 大阪府, 兵庫県	暑中見舞・年賀状	果樹の多品目化, 品質重視
4	50	県内, 名古屋市, 奈良県	暑中見舞・年賀状	トイレ改装, ワイン販売
5	60	大阪府, 奈良県	N.D.	品質重視
6	70	県内, 愛知県	暑中見舞・年賀状	品質重視
7	40	県内 (鈴鹿市, 四日市市)	暑中見舞・年賀状	果樹の多品目化
8	30	県内 (伊勢市), 名古屋市, 大阪府, 奈良県	中見舞・年賀状	少し多めにサービス
9	20-30	県内 (中南勢地域), 名古屋市	暑中見舞・年賀状	—
10	90	N.D.	暑中見舞・年賀状	—
11	70	N.D.	N.D.	トイレ改装
12	10	県内 (伊勢市), 大阪府, 名古屋市	暑中見舞・年賀状	イートインスペースの確保
13	90	県内, 奈良県	暑中見舞・年賀状	—
14	20	県内 (津市, 鈴鹿市), 名古屋市, 大阪府	年賀状	少し多めにサービス
15	20	県内 (伊勢市), 大阪府	暑中見舞・年賀状	少し多めにサービス
16	60	県内, 奈良県, 大阪府, 名古屋市, 京都府, 滋賀県	暑中見舞・年賀状	果樹の多品目化, 品質重視

(聞き取り調査により作成)

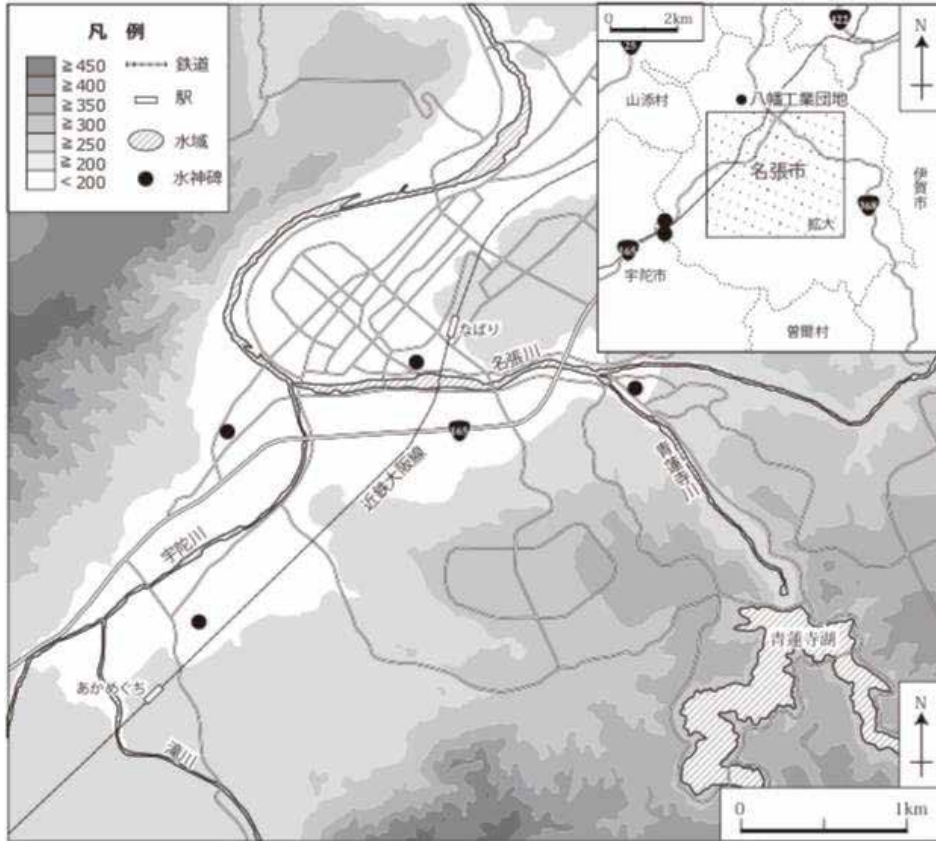


図 19 調査で確認できた水神碑の分布 (2017 年)

山地から流れ出る名張川の流路の延長線上の台地の部分にわずかであるが谷の後が確認でき、その延長上の現名張川の河床勾配が台地の河床勾配と調和的である。このことは、中心市街地が分布している台地がある時点で隆起したことにより、現在の名張川の流路が西側に巻きこむように流路を変えたことを示している。

### 3.3.3 水害の歴史と水神碑の分布

国土交通省 (2017) によれば、対象地域における主な水害は 1953 年 9 月の台風 13 号による被害と、1959 年 9 月の伊勢湾台風による被害の 2 つが記載されている。1953 年には、鍛冶町橋付近では橋桁の最上部にまで水位が上昇し、河川周辺部への浸水被害があったとされている。1959 年の災害は、より詳細に記録されている。湛水面積 1540ha を記録し、名張川では数カ所で堤防が決壊し氾濫した記録が残っている。新町橋、糸川橋、夏見橋などが流出し、市街地の高台を除く河川周辺部の低地全域が浸水し、繁華街にも浸水被害が及んでいる。

調査で確認できた水神碑の分布を図 19 に示す。多くの水神碑については、風化が激しく彫り込まれた記録や記載内容が読み取れないものが多かった。その中で、青蓮寺川と名張川の合流点付近に建立されている水神碑には「伊勢湾台風之跡」と刻まれた、伊勢湾台風による

水害の記録が示されている。また、赤目駅付近に建立された水神碑は、1858 年の水害史が刻まれている。この水神碑は、宇陀川支流の滝川の氾濫による被害について記されている。これらの水神碑は実際に水害の被害に遭った集落の周辺に建立されているが、その多くは洪水の危険がないところに建立されている。このような例は、国土交通省 (2019) に津波被害・津波石碑情報として災害碑の分布をまとめたものがあり、この地方に建立されている災害碑が津波の被害の及ばない高台に建立され、「ここより高いところに避難しろ」といった碑文が教訓として刻まれており、現在、その地域に居住する住民への防災情報としての役割を話している。本対象地域における水神碑についても、あえて高台の浸水の可能性のないところに建立することで、水を司る水神を祀る目的の他に、教訓碑として地域住民への避難情報を提供する役割を持たせるために建立場所を選択したと考えることができる。2017 年 10 月の台風 21 号の襲来時には、宇陀川右岸の名張川合流点から 0.6km 上流の名張市箕曲地先で溢水による水害が発生した (国土交通省, 2017)。この付近には宇陀川左岸側の高台に水神碑が建立されている。

### 3.3.4 河川水質からみた低地への流出量の推定

大雨の際の河川流量の増加は、流域の規模や地形地質、土地利用など様々な条件によって異なる。流域に

よって地質が異なり、河床勾配（図 20）にみられるように地形条件が異なる本地域では、それぞれの河川水の水質が異なることが考えられる。このことは、それぞれの河川水の水質と合流後の水質の変化をみることで、下流域におけるそれぞれの河川からの水量の混合

割合を推定できる可能性を示している。本研究では、通常時の河川流量の状態下で、上流から下流にかけて合流前と後での水質の違いから河川ごとの混合の程度が考えられる可能性について考察を行った。

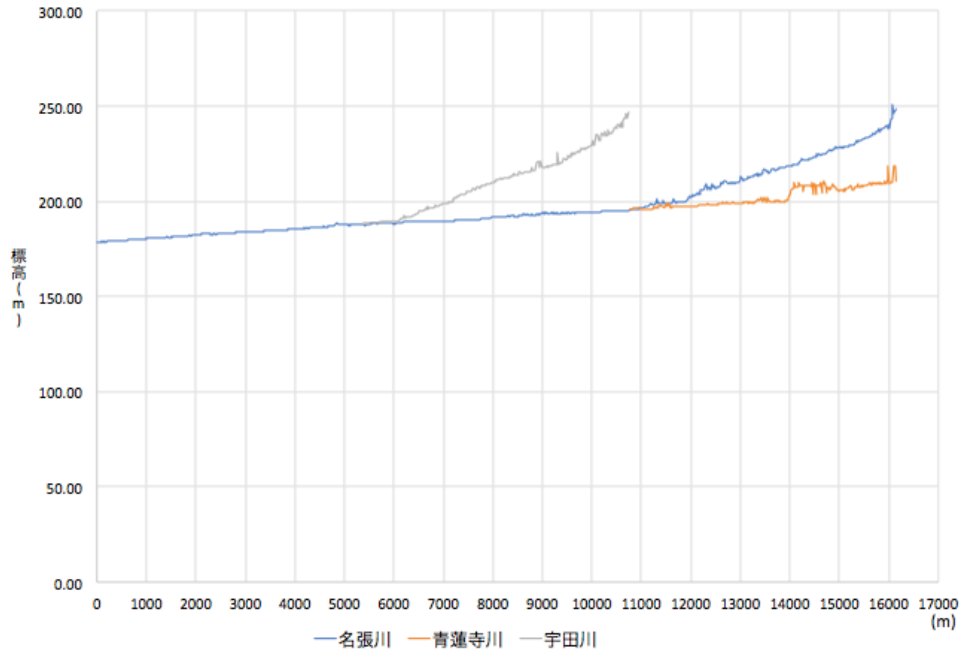


図 20 おもな河川の河床断面

（現地調査により作成）

2017年8月（灌漑期）と12月（非灌漑期）の河川水の水質組成分布を図21に示す。各河川の水質組成はCa-HCO<sub>3</sub>型で地域的差異はほぼない。一方、宇陀川支流のU1, U3, U4の各地点は8月と12月で水質組成が大きく異なっている。一方これらの支流が合流する宇陀川の下流U6ではこの影響はみられない。Ca-HCO<sub>3</sub>型の水質組成を持つ河川本流の水質組成は季節をとおして変わらないが、灌漑期にあたる8月には水質濃度が低下することがわかる。水質濃度の低下は宇陀川で大きい。宇陀川の流路近傍には水田が広く分布していることから、水田灌漑による落水の影響が強く出ていると考えることができる。8月の名張川最下流地点における水質組成は、名張川上流の水質濃度をより強く反映していることから、通常期は名張川と青蓮寺川からの流量が宇陀川よりも多いことを示唆している。2017年10月の台風21号襲来時には、宇陀川右岸の名張川合流点付近で溢水による水害が発生している。このことは、名張川からの流量の増加による宇陀川でのバックウォーターが発生したため、合流点手前での溢水に至ったことを示すものである。

### 3.3.5 小括

本研究により、対象地域における水神碑の分布は、東日本大震災の地震津波の被災地にみられる災害碑の

建立のされ方と同様に、過去の水害の履歴を示すとともに、現在、その地域に居住する住民への避難喚起に役立てられる場所に建立されていることがわかった。三重県地域においても災害碑や古文書に記されている災害記録をまとめ、今後の災害に向けた避難対策の構築に有効であることが示された。また、河川流量と水質組成や濃度の地域的差異から、洪水時の出水量について推定できることが示された。

## 4. 地理学野外実習の成果

地理学野外実習は4年次の卒業研究に向けた基盤構築に主眼を置いており、その目的は地域調査の手法取得にある（磯野・宮岡, 2017）。ゆえに調査内容の新規性よりむしろオーソドックスな地理学的課題を設定し、聞き取り調査、景観観察、土地利用調査、測量、採水といったフィールドワークの基礎的手法を着実に体得することが重要となる。2017年度の地理学野外実習で取り上げたテーマ（中心市街地、観光農園、水害）は、いずれも地理学の分野では十分に議論されてきた内容であった。当該テーマに関わる既往研究との比較を通して、今回の地理学野外実習では名張市の地域性を反映した有益な知見を得ることができたと思われる。

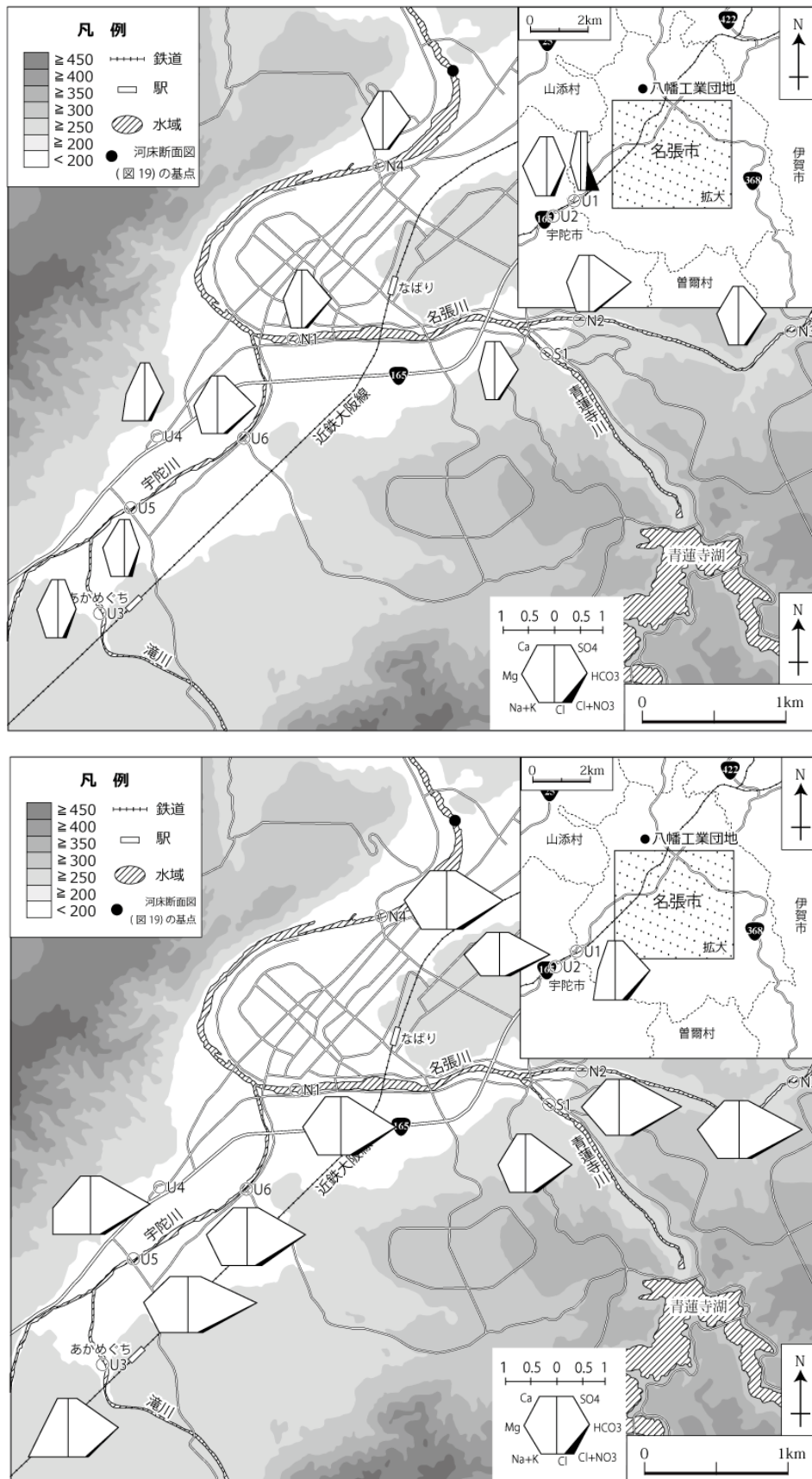


図21 灌漑期と非灌漑期の河川水の水質組成 (8・12月)

(現地調査により作成)

地方都市の中心市街地は空き店舗が連続した「シャッター通り化」が深刻化するなかで、近年では単なる小売り機能の提供にとどまらず、地域社会におけるコミュニティ維持といった観点から論じられる傾向にある（福井ほか, 2016）。都市内部の地域資源を有効に活用するためには、行政や地元住民、NPO などによる主体的な取り組みが必要と言われており、中心市街地班が題材とした歴史的町並みの活用はその一形態であると看取できる。とりわけ郊外型住宅団地の居住者に名張市の歴史文化を学習する機会を提供する空間づくりなどツーリズムに限定しない交流拠点づくりは、かつて大阪都市圏として郊外化が進展した名張市のひとつの特徴であると解釈できよう。

また、日本国内の農村では農業生産機能が相対的に低下し、レクリエーションや癒し、文化的・教育的価値、環境保全といった農業の「多面的機能」が重視されている（田林編, 2013）。立川（2005）によれば、現代の先進諸国の農村は農業生産以外の観点から評価されることが多くなっており、ツーリズムをはじめとする「消費空間」としての性格が強くなっている。こうした文脈下、モータリゼーションの進展によって発展した観光農園についてもその役割が再評価されつつある。青蓮寺地区の観光農園は周遊観光地の一拠点として発展した経緯を持ちつつも、近鉄との関わりが今なお強い点に特徴がある。また、青蓮寺地区では組織的に観光農園を管理運営し、利益の均等配分を目指す方式を採用している。他方、各観光農園は農業者の高齢化や担い手不足が問題となっていたため、本研究では個別経営に基づく多角的な経営を実現させ、「ブドウ栽培地域」としての商品価値を高める必要性を指摘した。この点については、井口ほか（2008）による論考を参照するなど、既往研究を踏まえた知見を提供することができたと考えられる。

水害をはじめとした自然災害に対する地域に残された履歴の整理は、国土交通省や三重県などにおいても進められている状況がある。本野外実習を実施した2017年度の時点で、対象地域における水神碑などの自然災害に関する碑の調査はまとめられておらず、その時点で水神碑分布調査は本地域における水害の履歴と先人の後世への警鐘の形をまとめることは、地域における防災減災対策の資料の提供という点で重要な調査であった。また、河川水質の変化から複数河川の出水量の推定は、限られたデータを用いて地域の水環境や自然災害の影響を把握するという点で挑戦的な試みであった。また、これらの調査と分析を通じ、自然地理学の基礎的な手法が地域の環境防災に役立てられること、それらの内容が小学校から高校までの各校種の社会科および地理の学習内容にひろく関係しているこ

とを学生に認識させることができる貴重な機会となった。

これらの研究成果は、地理学野外実習実施後も活用されている。たとえば、磯野・宮岡（2017）にあるように、講義科目の履修者を対象としたジェネラル・サーベイ形式のミニ巡検を名張市で実施した。地理学野外実習でテーマとした中心市街地、観光農園、水害（自然災害）はいずれも小学校社会科や中学校社会科地理的分野にて扱われている分野であり、社会科教員養成課程の学生にフィールドワーク教育の機会を提供するに際して好例地であると判断した。また、地理学野外実習のジェネラル・サーベイで訪れた勝手神社と春日丘地区もミニ巡検の訪問対象に含めることにした。その理由として、勝手神社は盆地や名張市の都市構造を大まかに俯瞰できるため、春日丘地区は名張市の郊外型住宅団地の現状から大阪都市圏の様相とその動態を考えることができるためである。また、同様の理由から、三重大学教育学部が実施する教員免許状更新講習でも、名張市にてフィールドワークを日帰りで行った。周遊ルートは上述のミニ巡検とほぼ同じである。

## 5. 今後の展望 —むすびに変えて—

本稿では、2017年度に三重県名張市で実施した「地理学野外実習」の成果を題材として、学部学生が名張市の地域性をどのように見出したのかをフィールドワークの実施内容に基づき整理し、地理学野外実習の成果を明示してきた。最後に、その成果に基づくフィールドワーク教育の今後の展望について触れておく。

磯野・宮岡（2017）でも言及したように、ミニ巡検の実施によって地理学専攻以外の学生も地理学的フィールドワーク教育を享受できるようになった。また、近年では中学校社会科や高等学校地理歴史科の副免許取得を希望する他専攻や他コースの学生も年々増加している。こうした状況下、地理学野外実習に参加する学生も多様化しており、たとえば2018年度は国語教育コースから1名、2019年度は学校教育コースと社会科教育コースの他専攻から各1名が当該科目を履修している。他コースや他専攻の学生参加は、地理学専攻の学生にとっても地域調査の方法を教えたり図表作成やその分析手法を指導したりする機会を創出するため、双方向的な効果をもたらしていると思われる。

学習指導要領の改訂によって地理総合が必修化される状況下、地理学的フィールドワーク教育の重要性はますます増すものと予想される。ゆえに、ミニ巡検のような地理学的フィールドワーク教育の実施機会も一層大きな意味をもつことになるであろう。こうした文脈において、学習指導要領に則った地理学的題材に豊



富な名張市の研究成果は、後進の「地域を視る目」を涵養するうえで有益な基礎資料として活用することができた。この点については、教員免許状更新講習に関しても同様のことが言える。よって、地理学野外実習で得られた知見は一定の社会還元性を有していると判断して良いだろう。

井田 (2016) も指摘するように、現状ではすべての学校現場に地理を専攻する教員が配置されているわけではなく、今後はこれまでに地理学にあまり接してこなかった教員が地理総合を受け持つ可能性も十分に考えられる。このような教員に対しては、教員免許状更新講習を介した地理学的なフィールドワーク経験が地理的スキルを養う重要な機会となろう。したがって、対外的な地理学的フィールドワーク教育の実施機会は、今後ますます増加すると予想される。ゆえに地理学野外実習を介した社会還元性の高いフィールドワーク成果をまとめることに加えて、ミニ巡検や教員免許状更新講習に限らない幅広い活用方を講じていくことも、将来的には議論していかねばならない。

## 付記

2017年度の地理学野外実習の実施にあたって、名張市役所都市整備部、産業部、危機管理室、教育委員会の皆様、青蓮寺湖観光村ぶどう組合の皆様、名張地区まちづくり推進協議会の皆様、はなびし庵の角田勝様・角田久子様には格別の御配慮を賜りました。また、名張市役所都市整備部都市計画室の福井貴子様には地理学野外実習に関わる全般の調整を行って頂きました。さらに、水害班担当箇所の図表作成にあたり、三重大学教育学部社会科教育コース学生の森木馨五様にご協力頂きました。以上、末筆ながら記して感謝申し上げます。なお、本稿は小西・清水(水害班)、近藤(観光農園班)、藤井(中心市街地班)が取りまとめた地理学野外実習の報告書内容(本稿の3章)を基に、磯野・宮岡が加筆・修正して全体の調整を行ったものである。本稿の執筆に際し、JSPS科学研究費補助金(若手研究, 19K20566, 研究代表者: 磯野 巧)の一部を使用した。

## 注

- 1) 地理学野外実習は地域調査の手法取得を主目的とした実習科目であり、社会科教育コースの地理学専攻の学生は必修科目となっている。標準履修年次は2・3年次であり、3年生がリーダーとして地域調査の内容や行程を決定し、それを2年生がアシストする構造となっている(磯野・宮岡, 2017)。
- 2) 参加人数に関しては、人文地理学分野の学生としてカウントした。
- 3) 景観要素について言及した研究として、磯野ほか (2015)

や太田 (1981) などがある。

- 4) 詳細は磯野・宮岡 (2017) を参照されたい。
- 5) 2018年度より、原則、地理学専攻の学部2年生のみが履修している。
- 6) 現在は近畿日本鉄道である。
- 7) 詳細は <http://www.yanase-shuku.com/event.html> (最終閲覧日: 2019年6月26日) を参照されたい。
- 8) 2015年農林業センサスに基づく。
- 9) 現在、この割引切符の販売は廃止されている。

## 引用文献

- 井口 梓・田林 明・トム＝ワルドチュック (2008): 石垣イチゴ地域にみる農村空間の商品化—静岡県増集落を事例として—. 新地理, 56(2), 1-20.
- 池 俊介 (2012): 地理教育における地域調査の現状と課題. E-journal GEO, 7, 35-42.
- 磯野 巧・安村健亮・渡辺亮佑・梁 鎮武・曲 宇航 (2015): 中山道望月宿における歴史的町並みの形成過程. 地域研究年報, 37, 1-31.
- 磯野 巧・宮岡邦任 (2017): 地方国立大学の社会科教員養成課程における地理学的フィールドワーク教育の再構築に向けた一考察. E-journal GEO, 12, 233-245.
- 磯野 巧 (2019): 三重県南部地域の活性化に向けた地理学的アプローチの可能性. ふびと, 70, 7-20.
- 磯野 巧・植手友浩 (2019): 三重県亀山市関町における歴史的町並みの空間利用. 三重大学教育学部研究紀要(人文科学), 70, 49-59.
- 井田仁康 (2014): 国際地理オリンピックと今後の課題. 日本地理学会発表要旨集, 85, 227.
- 井田仁康 (2016): 高等学校「地理」の動向と今後の地理教育の展望. 人文地理, 68, 66-78.
- 伊藤貴啓 (2012): 小学校社会科における地域事象の教材化と教師の力量形成 (I) —地域農業学習の授業実践分析から—. 愛知教育大学研究報告教育科学編, 61, 191-200.
- 太田博太郎 (1981): 歴史的町並みの総点検. 環境文化, 50, 1-3.
- 大野元義・磯野 巧 (2019): 愛知県一宮市における地域コンテンツの役割—ゆるキャラ「いちみん」を事例として—. 三重大学教育学部研究紀要(人文科学), 70, 61-73.
- 大橋智美・和泉貴士・小田宏信・斎藤 功 (2003): 製糸都市須坂における歴史的景観の保全. 地域調査報告, 25, 47-70.
- 兼子 純・新名阿津子・安河内智之・吉田 亮 (2004): 古河市における中心市街地の変容と都市観光への取り組み. 地域調査報告, 26, 123-150.
- 栗林 賢・全 志英・磯野 巧・呉羽正昭 (2011): 須坂市における果樹生産を活かしたアグリ・ツーリズムの展開. 地域研究年報, 33, 29-43.
- 呉羽正昭 (2013): レクリエーション・観光—ルーラル・ツーリズムの展開—. 田林 明編『商品化する日本の農村空間』農林統計出版, 29-44.
- 小池晶子 (2002): 茨城県千代田町における観光行動からみた

- 観光農園の展開. 茨城地理, 3, 1-17.
- 河本大地 (2018) : 大学初年次における「身近な地域」の調査とウィキペディア編集—奈良のならまちでの実践からみた有効性と課題—. E-journal GEO, 12, 534-548.
- 国土交通省木津川上流河川事務所 (2017) : 流域の災害の歴史 <https://www.kkr.mlit.go.jp/kizujyo/outline/history/> (最終閲覧日 : 2019年11月17日)
- 国土交通省東北地方整備局道路部 (2019) : 津波被害・津波石碑情報アーカイブ. <http://www.thr.mlit.go.jp/road/sekijihouhou/> (最終閲覧日 : 2019年11月17日)
- 国土交通省近畿地方整備局 (2017) : 台風21号と前線による大雨. [https://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/prepare/disaster/report/pdf/disa\\_01\\_20171026.pdf#search=%27%E5%90%8D%E5%BC%B5%E5%B7%9D+%E5%8F%B0%E9%A2%A821%E5%8F%B7%E6%B0%B4%E5%AE%B3%27](https://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/prepare/disaster/report/pdf/disa_01_20171026.pdf#search=%27%E5%90%8D%E5%BC%B5%E5%B7%9D+%E5%8F%B0%E9%A2%A821%E5%8F%B7%E6%B0%B4%E5%AE%B3%27) (最終閲覧日 : 2019年11月17日)
- 小堀貴亮 (1999) : 佐原における歴史的町並みの形成と保存の現状. 歴史地理学, 41(1), 21-34.
- 小山耕平・藤本理志 (2016) : 広島県内の洪水, 土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義. 地理科学, 72(1), 1-18.
- 篠原重則 (2000) : 地理教育における野外調査の実態とその再構築への提言. 新地理, 47, 132-141.
- 全 志英 (2013) : 飯田市龍江地区における観光農園の展開と経営特性. 地域研究年報, 35, 147-161.
- 淡野寧彦・呉羽正昭 (2006) : 茨城県桜川市真壁町における町並み保全運動と地域活性化. 茨城地理, 7, 21-36.
- 中尾千明 (2006) : 歴史的町並み保存地区における住民意識—福島県下郷町大内宿を事例に—. 歴史地理学, 48(1), 18-34.
- 名張市 (2016) : 『おきつもの名張 今と昔』名張市史編さん委員会編. 209p.
- 名張市 (2017) : 名張市統計書全編 <http://www.city.nabari.lg.jp/s008/110/220/120/20170609150107.html> (最終閲覧日 : 2019年6月21日)
- 西岡芳晴・尾崎正紀・山元孝広・川辺孝幸 (1998) : 名張地域の地質. 地域地質研究報(5万分の1地質図幅 京都). 地質調査所, 72p
- 沼畑早苗 (2019) : 高等地理教育におけるフィールドワークの効果. E-journal GEO, 14, 30-41.
- 林 琢也・呉羽正昭 (2010) : 長野盆地におけるアグリ・ツーリズムの変容—アップルライン(国道18号)を事例に—. 地理空間, 3, 113-138.
- 福井一喜・金 延景・上野李佳子・兼子 純 (2016) : 地方都市の中心市街地における新規事業の創出—長野県佐久市岩村田本町商店街の事例—. 都市地理学, 11, 59-70.
- 溝尾良隆・菅原由美子 (2001) : 川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全. 人文地理, 52, 84-99.
- 山内秀夫・山口幸男・菊地俊夫 (1986) : 国立大学教員養成系学部における地理学野外実習の実態について. 新地理, 33(4), 16-27.